

# あしやすふんクラブ通信

## 第2回登山教室

芦安ファンクラブ主催・芦安村協賛の第二回南アルプス芦安村登山教室が、五月二十日、二十一日の二日間にわたって開催された。一日目は芦安村交流センターふれあい館で、「登山の基礎知識」、「山の気象学」、「地図から学ぶ」というテーマで講習会が開かれ、二日目は夜叉神峠から高谷山、樺平のコースを歩く実地研修が行われた。

今回の登山教室の特色は、登山コースを芦安ファンクラブが新たに開拓したことである。高谷山、中池、樺平、松尾峠を結ぶコースで、芦安村や夜叉神観光協会の協力を得て、延べ百人を越える人たちが、ボランティアで登山道の整備に参加した。この道は、昭和三〇年頃までは村民の生活道として使われていたもので、今回の登山教室に向けて復活したものである。この取り組みには県森林行政からも指導、協力をいただき、樺平からのすばらしい眺望を得ることができた。このコースは教室終了後も看板を設置するなど、整備を進め、新たなハイキングコースとして広く紹介していく予定である。

証を手にした。参加者の感想の中では樺平から望む白峰三山の雄姿の他、芦安の伝統芸能である夜叉神太鼓への感動の声が大きかった。また、登ってみたい山として、北岳、甲斐駒、仙丈、鳳凰二山が人気を集め、初級中級といったクラス分けを望む声と共に、今後の登山教室の課題となった。

第三回登山教室は九月三〇日（土）一〇月一日（日）の二日間に行われ、開催予定である。第一日目は、「地図の見方」と「救急法」の講習で会場はやまびこホール（温泉ロッジ隣）。第二日目の登山は、2コースに分かれ初級が栗沢山、中級が仙丈岳を目指す。参加費は一万九千円。定員は五〇名、講習のみの参加も可。申し込みは電話またははがきで芦安ファンクラブ事務局へ。友人、知人をお誘いの上ご応募ください。九月十五日締切。

## 全国駒ヶ岳サミット

### 白州にて

第六回全国駒ヶ岳サミットが、白州町を主会場として、平成十一年七月十三日十五日までの三日間にわたって行われた。十三日は事前会議で関係市町村の話し合い、十四日はサミット開催、十五日は、甲斐駒記念登山という日程であった。

2000年  
(平成12年)  
**夏号**  
(第2号)

発行者：芦安ファンクラブ  
山梨県中巨摩郡芦安村芦倉  
1589-8  
055-288-2531

ペーン活動の実施の例として、南アルプスクラブの長年に渡る調査活動の努力がきっかけとなり昨年度から始められた、大樺沢への仮設トイレの設置により沢水から大腸菌が検出されなくなったことや、山岳環境保全のために、北岳山荘、北沢峠、南御室小屋へ環境にやさしいバイオトイレを設置すること等の実践例を発表し、今後、全国レベルでこみ、トイレ問題は検討されなければならない重要課題である。

あることが改めて関係者に認識された。  
また、サミットでは消失した避難小屋の再建のために、国レベルの補助制度や交付税制度を確立すべきであるとの声も聞かれた。全国から集まる登山者の安全確保が国レベルでの補助制度によらず、一関係市町村の財政に任せられている現状について、不満や問題点が析出した。これは、芦安村観光行政としては、雪崩による御池小屋倒壊問題を抱えているだけに真剣にとらえられなければならない意見でもある。

芦安村・企画観光課

深沢秀



### 芦安堰堤：村を守って72年

暴れ川で甲府盆地に多くの被害を出した御勅使川に設置された。この堤防は石積みで日本初のコンクリート利用という。



## ロケーション

アルプス造山運動が活発であったヨーロッパの山岳は、至る所に氷河が発達し、大鉦で削ぎ落としたような急峻で豪快な山容と、各所に氷河湖を配した穏やかな丘陵のバランスが見事だ。空の広いU字谷に生まれた集落からはすばらしい眺望が得られ、豊富な積雪が良好なスキー場をもたらしているため、四季を通じて楽しめる山岳基地・山岳リゾート地として発展してきている。それを芦安村に置き換えれば、北岳が4000mクラスの山で、大樺沢は氷河に覆われ、広い空を持った広河原に芦安の集落が形成されるようなものである。しかし現実には、芦安の集落からは北岳も富士山も見えない。芦安村に与えられた自然条件を有効に生かしながら活性化を求めてゆくことは非常に難しいと思われるが、弛みない努力を重ねてゆく必要を感じる。

## 交通システム

登山鉄道やロープウェイの普及は目覚しく、基地までは鉄道、そこからビューポイントまではロープウェイなどが整備されている。ここでは車は少ない。走っているのは電気自動車である。場所によっては車は完全に締め出され、肩身の狭い思いをしている。日本人のように登山鉄道やロープウェイに対するアレルギーはなく、むしろ一時的な自然破壊はあっても、こちらのほうが長い目で見れば車より環境維持に役立っているというコンセンサスがあるようだ。更に、それら交通設備そのものが景観形成のひとつの要素となっている。芦安に置き換えれば甲府 - 芦安間は鉄道、広河原までは登山電車、そこから北岳のビューポイントまでロープウェイといったところか。芦安村でも、自然環境を維持しながら、山に登れなくとも乗るだけでも楽しい交通システムの検討をする必要性を感じた。

## 受入態勢

生まれた自然資産を持つ芦安村でも、その価値を村民が認識し、官民一体となってそれらと共生しながら、景観形成や施設設備を進める道を進みたい。この村を訪れる人々がいつか「日本の笑顔と暖かい村」を目にする日を私は夢見ている。

塩沢久仙

ヨーロッパ各地では自然資産の価値を、国民や住民のすべてが十分に認識しているようだ。自然を大切に守りながら有効に利用してゆく方策を政府のリードで国を挙げて立てているようにも思える。ここでは、その土地固有の住宅や街並み、牧場、展望台、レストランやトレッキングルートに至るまで、一定の基本理念に基づいた総合的施設整備がなされている。

また、住民のすべてが一様に親切で、エトランゼに対しても「来てくれてありがとう」という考え方を持っているようで「ハロー」や「ボンジュール」の挨拶も心がこもり、日本の山の「コンニチハ」よりも暖かさを感じさせてくれる。この事が訪問者側にも伝わり、トレッキング中に出逢えた異国人同志にも連帯感が生じ、風景と共に人々の笑顔が印象的な観光地というイメージが残った。芦安村でもこのように村民全体が心をこめたもてなしのできる村でありたいと願わずにいられない。

## 登山靴であるいたヨーロッパスエーデン

去る五月二十三日〜六月六日、芦安ファンクラブの有志とともにヨーロッパスエーデンに研修に参加した。その結果報告は清水准一氏の「ヨーロッパスエーデントレッキングツアー」道中記、や遠山若枝氏の山梨日々新聞への投稿「スエーデンに学ぶ山岳観光」に詳しい。ここでは芦安村との比較に焦点を絞り、南アルプスを抱えるこれからの芦安村についての課題をさぐってみた。

## 21世紀の南アルプスを考える

山梨県森林環境部長・仲田公彦

芦安村にとって南アルプスは貴重な財産である。雄大な山並みに加え、自然林や稜線上の高山植物など豊かな自然に恵まれている。今後は少子高齢化社会を迎え、南アルプスを訪れる客層も、山の施設の利用方法も変わってくるであろう。この新しい時代に向けて提案を試みたい。

南アルプスを語るとき、河原の広場にあるレリーフの3人を忘れることはできない。

南アルプスを世界に紹介したウエストン、ウエストンが北岳に登ったとき全面的なサポートでこれを助けた名取運一、昭和三十七年野呂川林道を開通させた山梨県知事大野久の三人である。現在、南アルプスに多くの登山者が訪れる様になったのもこの人たちの功績によるところが大きい。私たちは、単にレリーフを顕彰するばかりでなく、大衆登山の歴史と山の現状を知り、心をこめて先人と大自然に感謝する機会を設けるべきである。来年はウエストンが北岳に登頂して百年目を迎える。その登頂記が広く世界に紹介されたのがきっかけとなって南アルプスは登山者のあこがれの山となった。これを機会に南アルプスの魅力を再PRすることは意義深いと思う。毎年行われる開山祭とあわせて、芦安村で何かイベントを企画できないものか。

次に高山植物である。北岳から仙丈ヶ岳、鳳凰三山は全国屈指の高山植物の宝庫であり群生地である。また、ここには多くの固有種も存在する。例えば、キタダケソウは北岳の頂上部にだけ咲く花として紹介されるが、言い換えれば世界中で芦安村にしかない植物であると言える。芦安村民は、この地球上に芦安村にしかない貴重な財産をもっているのである。私たちは、この貴重な財産を未永く残して行く責任をおっているのである。また、今や高山植物の敵は盗掘や踏み荒らしばかりではなく、酸性雨や温暖化など地球規模での環境汚染もある。平成十一年の調査で初めて、北岳において酸性雨が確認された。これは、アルカリ性土壌を好むキタダケソウには非常に厳しい環境である。

また、山小屋や山岳トイレ施設の改善を要望したい。これからの登山者数は、今より増加することは望めないだろう。若い登山者の増加もそれほど期待することはできない。限られた登山客に楽しい思い出を提供し、宿泊数を重ねていただくことが山小屋の生き残る道ではないか。南アルプスの稜線は見事な高山植物の花畑に覆われ、富士山から北アルプスまで見回せる山岳景観は一日中見ていると飽きることはないすばらしいものである。十時間もかけて登り、翌朝、来光を見ただけで下るのでは余りに勿体無い。これらの人たちがゆつくりとテラスでコーヒーでも飲みながら雷鳥と話をしたり、高山植物を見ながら昼寝でもできたらこの上もない贅沢であろう。そのために連泊したい登山者に個室を設け、談話室などのある小屋や環境にやさしい快適なトイレの設置はぜひ検討してほしい。

最後に山岳景観と登山者の安全対策である。今、南アルプスの道標は、あるところには複数あったり、情報が必要な場所には道標がなかったりする。登山者の安全確保のためには、景観に配慮しつつも必要な情報を提供する道標の設置が急務である。一方で、厳しい山の中で遭難する人も後を絶たない。このために至る処で遭難碑を目にするようになる。この碑は遺族にとっては大切なものであるが、登山者にとっては山岳景観を損ね、心を痛めるものにはすぎない。そこで、厳しい山岳の上部ではなく遺族も来やすい広河原などへ合碑すれば山岳景観を守り、かつ関係者も思い出の場所に危険を冒さず訪れられるのではないか。以上、皆と一緒に考えられるきっかけになればいいと思う。

今春より介護保険制度が導入されて民間企業が福祉サービスの現場へ積極的に参入し始めた。これにより芦安村に住む高齢者の生活や、村の福祉行政に新しい方向性が求められるようになりつつある。昭和六三年より十三年間、保健婦として村の保険福祉行政に携わってきた長谷部裕子氏は、この新しい福祉制度のもとで行政が担うべき役割と、高齢者が抱える問題点やその解決策について提言している。

## 芦・安・村

## 「セルフケア能力を高

## める村づくり」

の判断で民間の提供する数あるサービスの中から最良のひとつを選び出す自主性が求められている。長谷部氏はこれを「セルフ・ケア能力」と呼び、高齢者が自分の人生は自分でつくる」という主体性を持ち、自立してゆくことを手助けするのが行政の役割だと考えている。現在、芦安村には二十名の独り暮らしの高齢者（六十五歳以上）が生活している。これらの高齢者が健康づくりのために芦安村がどうあつたらいいのかを自ら考え、それを表現し、人に伝えてゆくことが大切である。長谷部氏は、自分の意見をストレートに述べることにためらいがちなこの世代の人々から生の声を聞き、本人の意思を尊重したうえで、最良のサービスを選ぶ手助けをしている。氏はこの春「寝たきり予防推進委員会」を立ち上げ、高齢者が自分の意見を無理なく表現できる環境づくりに努めている。また、具体的な方法は？という質問に対し、住民と保険・医療・福祉・教育等の分野にかかわる人が一体となり、自分たちの村がどうあつたらいいかという村づくりの視点で話し合う必要性を強調していた。

これまでの福祉制度は行政主導型だったと長谷部氏は特徴づける。これは、居住町村の限られたサービスを行政が住民に提供するあり方のことである。しかし、介護保険制度の導入は民間業者のこの分野への参入と相互の競争を促すため、これまでのような行政主導の福祉は現状に合わなくなってきた。今、高齢者には、行政が提供する福祉サービスをただ受け取るのではなく、自ら

# 時を越えていま

蔵岳を目指し奈良田を出発した。

## 鳳凰山

芦安が表口登山道となっている鳳凰山には、奈良朝の昔、孝謙女帝が登られたと言つ伝説が残されている。女帝は仏教を深く信仰されており、法号を「奈良法皇」と言ひた。

あるとき女帝は突然の病に倒れてしまった。病はとも重く、医者がいかなる薬を差し上げて、祈禱師があらゆる秘法をこらしてお祈りをささげても全く効かず、女帝は床に伏して苦しみ続けた。そんなある夜、女帝の夢枕に「甲斐の国、湯島の郷にたいまつよく効く不思議な湯がある。そこ湯治に行けば病は必ず治るであらう。」とつお告げが聞こえた。女帝はすぐさま夢に現われた甲斐の国のことを探る。翌朝早く、お供の者を連れて旅立った。病を患っていた女帝は、たいまつ苦しみがながらも、必死の思いで遠く山奥にある湯島の郷、奈良田へ辿り付いたのである。そして、そこで湯治に専念すると丸一年、重く苦しむ病はいついつ全快した。病から解放された女帝は、地

湯治を続ける期間中、女帝は奈良田から見える甲斐の国の山々の素晴らしさに心を奪われ、その中でも中央に気高くそびえる地蔵岳の姿には、たいまつ心を打たれた様子であった。

女帝は数々の苦難を乗り越え、夜叉神峠、杖立峠、辻山、南小室、砂払いを経て白砂まばゆい薬師岳の頂上にたつことができた。そして、女帝は念願の地蔵岳へ向かい、女性の安産と子育ての祈りを込めて頂上に地蔵尊を安置した。帰りは道を変え、東側の道の道を下山すると、里人がこれを歓迎して、大きな石の上にカヤを敷きつめ、御座所として女帝を招いた。それ以来この地を御座石と呼び、この山を御座石山と呼ぶようになったのである。

里人たちはこのことを後世に伝えるため、女帝の法号である「法皇」を取って薬師、観音、地蔵の三山を「法皇」と名づけたが、後に仏教の霊長である鳳凰の字をあて、「鳳凰山」としたと言ひ伝えられている。

## 歴史を物語る 芦安の地名

### 荷替場（にげえば）

桃の木温泉から約2.5km、御勅使川を上流へ進み、右から流れ込むヤロク沢を越えた辺りの広まった河川の左岸側の平地、早川町奈良田と芦安村との交流の場所でもある。

かつて人々はその場所でも各々の特産物、生活必需品を物々交換した。当時、荷物は人肩で背負っていた時代だったので、この地は荷を替えた場所「荷替場」と呼ばれるようになった。しかし、地形的に見ると御勅使川上流のこの地へは、奈良田方面からはドノコヤ峠を越えなければならず、文字通り、一山越えての交流であった。また、芦安側からの沢沿いに造られた山道は、ひとたび大雨になると一気に道が流されてしまい、通行に大変難儀をしたものだったという。



芦安ファンクラブ通信は年4回発行し、芦安村の活性化を目指す様々な提言をしてゆきたいと思ひます。読者の皆様からの御意見はファンクラブの活動を有意義な内容にするために不可欠です。どうか、自由で遠慮のない声をお聞かせください。芦安ファンクラブに関する詳しいお問い合わせ、入会のご希望は下記まで。尚、年会費は1,000円、南アルプスと芦安村に夢を語ってくださる方でしたらどなたでも大歓迎です。

〒400-0241

山梨県中巨摩郡芦安村芦倉1589-8

電話055(288)2531

芦安ファンクラブ事務局「ペンションらんたん」大滝